

## 岩手県旧末崎村が設置した明治二十九年，昭和八年三陸大津波に係る 海嘯襲来地点標石について

白幡 勝美\*

### § 1 はじめに

昭和 8 年の大津波の後，岩手県旧末崎村では明治 29 年，昭和 8 年の大津波の到達点に標柱が設置され，各々「明治二十九年海嘯襲来地点」，「昭和 8 年海嘯襲来地点」と刻まれている。

この標柱は板状であり，大船渡博物館の表記では「海嘯襲来地点標石」または略して「標石」の名称が用いられているので，本稿でも，旧末崎村の標柱を「海嘯襲来地点標石」，「標石」と表すことにする。特に標石を 1 本ずつ正確に区別する必要があるときは，「地区名」＋「明治二十九年」又は「昭和八年」＋「海嘯襲来地点標石」と表記することにし，混乱の無い場合には「地区名」＋「明治」又は「昭和」＋「海嘯標石」とする。

海嘯襲来地点標石は § 3 に記載するように，津波の記念碑等に比べればかなり小さいものであり，かつ，道端や川沿いに設置されている。

### § 2 海嘯襲来地点標石の設置数と設置地点

松崎細浦 150-1 に長源寺がある。

ここに，津浪横死者供養碑が建てられている。この碑の裏面には慶長以来の歴史津波が列記されていて，所謂気仙地方の海岸が如何にその被害に苦しんできたのかが分かる。

裏面の下段には，

「・・・

一 明治廿九年昭和八年両度ノ村内津浪襲来地点ハ村内廿八ヶ所ニ設置ノ津浪襲来地点標石ニ示ス此ノ費用ハ東京朝日新聞社指定義



高さ 296cm  
幅 128cm  
奥行 21cm

写真 1 長源寺：津浪横死者供養碑

援金ニヨル」とあり，旧末崎村には 28 基の標石が設置されたことが分かる。

この 28 基の設置場所を伝える設置時の文書等があるのかどうかについては不明である。

そのうち 20 基については平成 20 年度大船渡博物館が行った企画展示事業及び海フェスタいわて実施事業『荒れ狂う海・津波の記憶展示図録』の中の「末崎町内海嘯襲来地点標石位置図」に示されていて，残る 8 ヶ所は「所在不明」とされていた。

この「末崎町内海嘯襲来地点標石位置図」から，大部分の標石は細浦湾～門之浜湾を結ぶ線と門の浜～基石海岸を結ぶ海岸沿いに見つかっていたことが分かるが，20 ヶ所の標石の内，16 ヶ所は，8 × 2 ヶ所の形で分布しており，しかも各々の 2 ヶ所は明治 29 年の三陸大津波の襲来地点の標石と昭和 8 年の三陸大津波の襲来を示すものとなっている。

このことから，28 基は全て明治と昭和の標石が対にして設置されたものと推測された。本稿は，旧末崎村の海嘯襲来地点標石の設置の実際を確かめ，この度の東日本太平洋沖地震津波を経てどのような状態で残されている

\*気仙沼市



図 I 末崎町内海嘯襲来地点標石位置図

- 印：昭和 8 年海嘯襲来地点標石
- 印：明治 29 年海嘯襲来地点標石

のかについて平成 25 年，28 年に調べたものである。

### § 3 各地区での海嘯襲来地点標石

図 I を参考にしつつ，旧末崎村の津波被害を受けている地区を 5 つに分け，調査の結果を国土地理院地図の中に示す。

以下，図中の記号は次のように標石を示すものとする。

- 印：昭和 8 年海嘯襲来地点標石
- 印：明治 29 年海嘯襲来地点標石
- ◎印：海嘯襲来地点標石存在の伝承，証言

また図 i の中の (j) の標石の写真を写真 i (j) と表すことにする。

標石の高さは標石全体が見える時にはその長さを，標石が立っているときには地表から頂部までの長さとする。

#### 1 石浜周辺

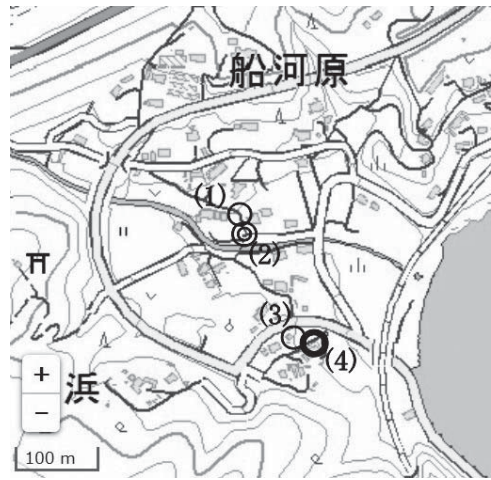


図 1 石浜周辺地図

- (1) (2) と対になっている (2) には昭和標石がかかって存在したという証言がある。
- (3) と (4) は対になっている。



高さ 91cm  
幅 20cm  
厚さ 5cm

写真 1(1) 石浜 3 番地付近明治海嘯標石

この標石そのものは粘板岩であり，且つ割り出したものがそのまま用いられている。このことは以下に述べる総ての標石に共通しているものである。

表面に「明治二十九年海嘯襲来地点」刻まれているが，他の標柱も「明治二十九年海嘯襲来地点」または，「昭和八年海嘯襲来地点」と刻まれている。



写真 1(2) 石浜 3 番地付近昭和海嘯標石跡

電柱付近に昭和海嘯襲来地点標石があった。何らかの出来事があって撤去されたらしく，30～40年位前に急に標石が無くなり，標石の破片が川から見つかったという。



高さ 117cm  
幅 23cm  
奥行き 9cm

写真 1(3) 石浜 14 番地付近明治海嘯標石

石垣に立て掛けてあるだけである。道路工事で現位置に置かれたものとみられる。

この度東日本太平洋沖地震津波の到達境界にあたる。



高さ 121cm  
幅 23cm  
厚さ 8cm

写真 1(4) 石浜 14 番地付近昭和海嘯標石

これも，道路工事で現位置に置かれたものとみられる。この度の津波では付近は渦を巻いた流れがあったが，元の位置のままであったとみられる。

## 2 細浦周辺



図 2 細浦周辺地図

(1) と (2)，(3) と (4)，(5) と (6) は明治・昭和の標石の対になっている。



高さ 96cm  
幅 25cm  
奥行き 6cm

写真 2(1) 内田 142 番地付近明治海嘯標石

民家の敷地内，道路との直ぐ境に立っている。



高さ 90cm  
幅 24cm  
厚さ 6cm

写真 2(2) 内田 142 番地付近昭和海嘯標石

BRT の函渠の直ぐ近く、海側の土手の下に立っている。



写真 2(3) 長源寺東側参道明治海嘯標石跡

東日本太平洋沖地震津波により流出。回収。東側参道を登り大きく左に曲がる所。



高さ 150cm  
幅 25cm  
厚さ 8cm

写真 2(3)b 長源寺東側参道明治海嘯標石

近くの石垣に載せてあるだけである。

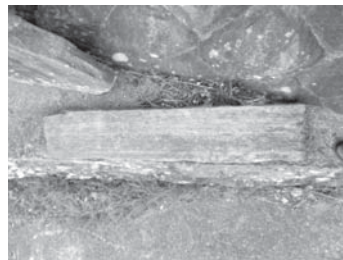
誤って「明治廿八年・・・」と刻んでいる。

このことは長源寺住職谷山誠志氏の指摘である。



写真 2(4) 長源寺東参道近昭和海嘯標石跡

電柱の後側である。ここは東側参道登り始めの直ぐ前である。



高さ 116cm  
幅 22cm  
厚さ 7cm

写真 2(4)b 長源寺東参道近昭和海嘯標石

東日本太平洋沖地震津波により流出した。これも図 2 の (3) の標石と同じ石垣の上に在る。



幅 24cm  
厚さ 6cm

写真 2(5) 上中野昭和海嘯標石跡

東日本太平洋沖地震津波により流出。

写真は川底を撮ったものである。碑は折れて流失している。折れ跡が写真中央やや左に縦に黒く見える。



高さ 77cm  
幅 24cm  
厚さ 8cm

写真 2(6) 上中野明治海嘯標石

民家の生け垣の中に佇んでいる。  
見つけ難い場所である。



写真 2(7) 小細浦明治海嘯標石跡

標石は野球場掲示版の付近に立っていたが  
東日本太平洋沖地震津波により流出した。



写真 2(7)b 小細浦明治海嘯標石

写真は大船渡市立博物館の提供である。平成  
24年に収蔵とのことである。



写真 2(8) 小細浦昭和海嘯標石跡

ゴミ収納ボックスと電柱の間に立っていた  
はずという。

しかしここに在ったと指差しまでできる住  
民には会っていない。

### 3 門の浜周辺



図 3 門の浜周辺地図

(1)と(2), (3)と(4), (5)と(6), (7)  
と(8)は明治・昭和の標石対を成している。  
(3)と(4)は津波到達地点を押さえるため  
仮の物として立てられてものと思われる木  
製の杭の位置そのものである。この杭は平成  
25年時には既にあった。



高さ 120cm  
幅 23cm  
厚さ 8cm

写真 3(1) 高清水明治海嘯標石

民家の石垣の脇に立っている。津波により一度は流出しているものであろう。



高さ 120cm  
幅 23cm  
奥行き 6cm

写真 3(2) 高清水昭和海嘯標石

東日本太平洋沖地震津波により流出。回収。平成 25 年時には小舟とブロック塀に挟まれるようにして横たわっていた。標石は津波時に折れたとみられる。



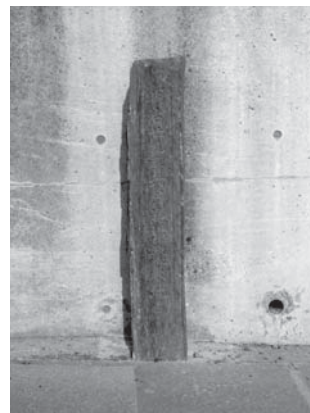
写真 3(3) 大田明治海嘯標石跡

4cm × 4cm の断面の木杭は誰が建てたのかは不明であるが、国土交通省による『津波石碑一覧シート』の「岩手 181 の対象マップ」に見る明治三陸津波の到達点に当たると見られることから、ここに地元へ伝えられる海嘯標石がかつて在ったとしたものである。



写真 3(4) 大田昭和海嘯標石跡

図 3 の (3) と同様に木杭があるが、「岩手 181 の対象マップ」に見る昭和三陸津波の到達点に当たると見られることから海嘯標石跡としたものである。また、この位置は大田団地西側を流れる川の上流から 2 番目と 3 番目の橋の間に標石があったとする証言と合う。この度の津波まで、近くに住んでいた大友則義氏は道路工事の際に埋められたのだと話す。



高さ 98cm  
幅 17cm  
厚さ 7cm

写真 3(5) 鶴巻明治海嘯標石

民家のコンクリート壁の脇に屹立している。津波以前と同様の姿であるという。

ただし，東日本太平洋沖地震津波により流出したものを市に働きかけて再度建ててもらったとのことである。



写真 3(6) 鶴巻昭和海嘯標石跡

近くに住む住民の方より，子供の頃，この地点で畦にかけてある標石を渡ったとの体験談を聴くことができた。



写真 3(7)b 門之浜東部明治海嘯標石跡

東日本太平洋沖地震津波により流出。やや深いコンクリートの水路の曲がり角の近くにある標石が，写真中央下部に写っている。



幅 23cm  
厚さ 6cm

写真 3(7)b 門之浜東部明治海嘯標石

平成 25 年度 5 月には，近くに置きっ放しであったが，平成 28 年 4 月の段階では大船渡市立博物館に收藏されている。



写真 3(8) 門之浜東部昭和海嘯標石跡

標石は東日本太平洋沖地震津波により流出。写真中央の道脇に立っていた。



図 4 泊里漁港周辺地図

(1) と (2)，(3) と (4) は対になっている。



写真 4(1) 泊里漁港西周辺明治海嘯標石跡

東日本太平洋沖地震津波以前に失われていた。その時期は，図 4 中の (1) の三叉路の位置に石碑が整備された時期であるとする住民が多い。この位置の近くに住む及川宗夫氏

によると標石は中央の地蔵尊の足元にあったとのことである。



高さ 106cm  
幅 24cm  
厚さ 8cm

写真 4(2) 泊里漁港西周辺昭和海嘯標石

東日本太平洋沖地震津波にも耐え、屹立。津波の流れが激しかったことを考えると奇跡的な姿である。



高さ 97cm  
幅 22cm  
奥行き 6cm

写真 4(3) 泊里漁港東周辺明治海嘯標石

東日本太平洋沖地震津波浸水域にあるが影響なし。昭和の後期に道路工事車両によって破壊されていたものを、熊上 眞氏が標石をコンクリートで補強し、庭先に設置したものである。この標石の直ぐ南側の消防屯所は被災し、今は跡形もない。



高さ 168cm  
幅 25cm  
厚さ 7cm

写真 4(4) 泊里漁港東周辺昭和海嘯標石

東日本太平洋沖地震津波により流出。回収。道路より一段低くなった、田の畦の部分の草むらに横たわっていた。



図 5 碁石浜付近

標石の (1) と (2) は対になっている。



高さ 154cm  
幅 19cm  
厚さ 7cm

写真 5(1) 碁石明治海嘯標石

東日本太平洋沖地震津波により流出。回収。もともと在った場所の道路を挟んで反対側山側に横たわっていた。





高さ 101cm  
幅 27cm  
奥行き 9cm

写真 5(2) 碇石昭和海嘯標石

東日本太平洋沖地震津波以前に失われたと  
思われたが，平成 28 年 4 月の調査時に舗装  
道路の土手の下近くに確認された。

#### § 4 まとめ

現段階で大船渡市立博物館『荒れ狂う海・  
津波の記憶 展示図録』（以降，“大船渡市立  
博物館展示図録”と略期）に示されている海  
嘯襲来地点標石を中心に調査結果をまとめた

表 1 旧末崎村に設置された海嘯襲来地点  
標石の確認状況

		石 浜 周 辺		細 浦 周 辺		門 の 浦 周 辺		泊 里 浜 周 辺		碇 石 浜 周 辺		全 体	
		H 25	H 28	H 25	H 28	H 25	H 28	H 25	H 28	H 25	H 28	H 25	H 28
展 示 図 録 博 館	屹立した状態 で確認	1	1	5	5	2	2	2	2	0	1	10	11
	倒伏した状態 で確認	2	2	0	0	3	2	1	1	1	1	7	6
	流失・移動し た状態で確認	0	0	2	2	0	1	0	0	1	0	3	3
展 示 図 録 博 館 以 外	屹立した状態 で確認	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	倒伏した状態 で確認	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	伝承を確認	1	1	1	1	3	3	1	1	0	0	6	6
	情報無し											2	2
合 計		4	4	8	8	8	8	4	4	2	2	28	28

ものが以下の表 1 である。

H25, H28 は平成 25 年 5 月 31 日及び平成 28  
年 4 月 10 日付けで確認したことを示す。

28 基の標石が設置されていたが，現在も  
確かに立っているのが 11 基であり，倒伏状  
態（石垣などに依り掛かっている状態を含む）  
のものが 6 基，行方不明のものが 3 基（2 基  
は大船渡市立博物館収蔵されている。）であ  
ることが分かる。証言・伝承があったものは  
6 基であり，残る 2 基については情報が全く  
無いままである。

なお，屹立状態と見取った 11 基の内 1 基  
（図 3 の（5）の標石）はこの度の大津波の  
後に立て直したものである。

図 2 の（6），図 3 の（2），（7）のよう  
に折れ標石（一基流失）があるなど，大船市立  
博物館展示図録に記された標石が大きな被害  
を受けている。

そして，震災直後，2 年後，5 年後では標  
石の状態は全体としては，大きな変化が起き  
ていない。このことは 2 年後までに被災した  
標石が一応回収されたものの，5 年経っても  
震災からの復旧・復興がこのような標石の整  
備に及んでいないことを示している。

2 度の調査を実施し，改めて認識させられ  
るのは明治二十九年，昭和八年三陸大津波の  
到達地点がセットにして建立されたことの持  
つ意義の大きさである。例えば，『昭和八年  
三陸大津波に係る津波境標柱の宮城県日本吉  
郡を中心とする分布について』に示したよう  
に，他の津波被災地にも同様に，津波の到達  
地点を示す標柱が建立されてはいるが，これ  
だけ，確かなビジョンをもって組織的に取り  
組まれた例は外には見ることはできないもの  
である。津波防災への啓蒙を図る取り組みと  
して特筆されてよいものであろう。旧末崎村  
地区の住民の津波防災に関する意識にも影響  
を与えている可能性があると思われる。

嵩上げ等の復旧工事の終了の後には，多く  
の海嘯襲来地点標石の再設置が必要であるが，  
合わせて東日本太平洋沖地震津波の到達点を  
示す標石も建てたいとの住民の声も聞してい  
る。是非そのようであってほしいものである。

## 謝辞

調査を行うに当たって助言と励ましを頂きました気仙沼市教育委員会幡野寛治氏に、また、貴重な情報を提供頂きました大船渡市立博物館、並びに同学芸員工藤やよい氏に、

石浜周辺の調査では、高橋ユリ子、熊谷勝美、松岡幸子氏に、

細浦湾周辺の調査では、長源寺住職、地元在住小川雪子、小松智友氏、菅原公男、菊地球司氏に、

門之浜周辺の調査では、地元在住大友則義、鎌田正、大友松雄、武田国康、尾形慶孝、佐藤フミ子、沼倉正一、大和田養吾、大友慶吾氏に、

泊里浜周辺の調査では、地元在住及川宗夫、熊上 眞、及川宗夫、熊谷芳弘氏に、

碁石浜周辺の調査では、地元在住大和田勝、鎌田港一氏に、そして多くの末崎地区の皆さんにご協力を頂きました。心から感謝致します。

## 参考文献

『昭和八年三陸大津波に係る津波境標柱の宮城県旧本吉郡を中心とする分布について』  
白幡勝美 津波工学研究報告第 31 号 平成 26 年 3 月

『気仙沼市における明治・昭和津波関係碑』  
白幡勝美 佐藤健一 三陸印刷 2014 年 3 月

『荒れ狂う海・津波の記憶展示図録』大船渡市立博物館 平成 20 年

『東日本大震災津波詳細地図』上巻 原口強、岩松暉 2011 年 10 月 古今書院

『忘れるな 三陸沿岸大津波 災禍を語る路傍の石碑』上西 勇 平成 25 年 3 月